

福祉施設に おける ボランティア受け

特集

～利用者、活動者のニーズに合わせたボラン

地域に開かれた福祉施設をめざして、積極的なボランティア受け入れを展開

●社会福祉法人 東京栄和会 なぎさ音楽苑 [東京都江戸川区]
<http://www.nagisawarakuen.or.jp>



地域の方を招いて行う盆踊り大会

「なぎさ音楽苑」は、昭和40年に東京23区初の特別養護老人ホームとして足立区に設立され、昭和55年に現在の江戸川区に移転した経緯がある。施設利用者は現在、特別養護老人ホーム120名、ショートステイ20名、生活支援ハウス10名の計150名。このほか、在宅支援で約200名の利用者を対象に各種在宅サービスを展開している。

同施設は、江戸川区への移転に伴い、「地域に根ざした施設を」という方針のもとで、地域住民を中心としたボランティア活動を積極的に受け入れ、現在に至るまでの26年間、多種多様なボランティア活動支援の実績をもっている。

●ボランティア活動の特徴について

「なぎさ音楽苑」におけるボランティア受け入れの基本理念は「細く長く」というものである。いきなり週何日もの活動を設定するのではなく、最初のうちは週1回、月に数回程度様子を伺うなど、ボランティア自身が長くかかわれるような配慮がなされている。

また、活動内容によっては、なるべくボランティアと利用者の関係を大事にするために、職員ができるだけ関与しないことが特徴となっ

「ボランティア喫茶」は、地域のボランティアの芽を育てる
ことにもつながっている



おり、例えば、1階ロビーに開設されている「ボランティア喫茶」では、地元のボランティア・サークル「たんぼぼ」のメンバーが主体となり、入所者や職員に対して喫茶サービスを提供している。

現在、個人で登録しているボランティア数は約

150名、登録団体が約30あり、年間の延べ活動者数は6,500～7,000名にのぼる。

主な活動内容は、職員の補助をはじめとして、洗濯、食事介助、理美容、外出援助、地域散策の付き添いなど多岐にわたるが、入浴、排泄など利用者のプライバシーに深くかかわる活動や、マッサージなどの身体に触れることによって事故が生じやすいものなど、ボランティア自身を守ることができない活動については、安全確保の視点から受け入れを見送るケースもあるという。



ボランティア受け入れの 取り組みに「限界」はありません

あだちまさのり
足立昌紀さん

社会福祉法人 東京栄和会 なぎさ音楽苑 ボランティア担当

当苑では、ボランティア活動の受け入れのため、年間30～40人ほどの新規活動者に対するオリエンテーションを行っています。

ボランティア活動本来の趣旨からいって、ご自身の「自発性」や「自主性」を重んじることが第一です。しかし、企業や学校などから義務的に参加してくるボランティア希望者についても、一人ひとりの適性と希望をお聴きして、施設内のニーズとつなぎ合わせる可能性を検討して

●施設内コーディネーターの重要性

ボランティアの受け入れに当たっては、基本的には「来るもの拒まず」の姿勢をとっている。ボランティア担当職員の足立昌紀さんが、毎回必ず一人につき1～2時間のオリエンテーションを行い、なるべく緊張をほくしながら、活動希望に至った経緯などをできるだけ詳しく伺いながら関係の形成を図り、適切なニーズと結びつけるコーディネートを展開している。これには、いきいきとした活動へと導くことでボランティア自身のやりがいや成長を促し、職員や利用者とは友好な関係を築けるように配慮している。

また、ボランティア希望者との面談が、新たな活動を生み出すためのヒントとなったり、現場の職員の声に耳を傾けることによって、今までは想定外であったニーズの発掘といった効果を生んでおり、ボランティアとニーズとのベスト・マッチングを実現するために、施設内コーディネーターの存在が重要な役割を担っているのである。

●活動者へのフォローと、地域とのかかわり

「なぎさ音楽苑」では、職員の新任研修時にボランティア受け入れのための研修も行っており、ボランティア受け入れの初日には、職員が必ず笑顔で対応するなど「活動しやすい雰囲気づくり」が徹底されている。

また、ボランティア活動者の自治組織もつくられており、ボランティア自身の声は運営委員会を通じて職員に伝えられるしくみになっている。

さらに、地域密着型の開かれた施設という視点から、地域でのボランティア活動の第一歩を踏み出したい人のために、新規ボランティア養成講座を開催していることも特筆すべき点である。

この講座の目的は、現在施設で活動しているボランティア自身の体験談など同じ立場の方からの助言や、利用者やボランティアとのエピソードなどを通して、「なぎさ音楽苑」での活動に限らず、広く地域でのボランティア活動への参加意識を高めることにある。

今後の課題について、足立さんは「子育て中の若い主婦層や、定年退職後の男性をいかにして受け入れていくかが目標で、そのためのメニューの整備が重要となっています」と述べている。「なぎさ音楽苑」では、地域に開かれた施設として、地域、利用者、施設による三位一体を理想としながら、積極的な取り組みを展開中である。

「地域まつり」では、利用者が主催者側としての役割を担う

いきます。

どんな方でもボランティアの活動初日には、「受け入れてもらえるだろうか」と不安な気持ちでいらっしゃると思いますので、必ず一人の担当者がオリエンテーションから導入までの一連の流れを行い、担当部署へ一緒に出向いて職員や利用者へつなげる役目もしています。

より広く地域に開かれた施設を標榜する当苑にとって、ボランティア受け入れの取り組みに「限界」はありませんので、今後もできるかぎりの努力を続けていく考えです。

「なぎさ音楽苑」でのボランティア・コーディネートを任されて5年になりますが、この仕事を通じてさまざまな方との出会いがあり、そのことによって価値観や視野が広がるなど、私自身が着実に成長していることも事実です。

入れの現状と課題

ティアコーディネーションに向けて～

多様な人たちとのかかわりを 入所児童の成長へとつなげる取り組み

●大阪府立整肢学院 [大阪府大阪市]

<http://www16.ocn.ne.jp/~o-seishi/index.html>

「大阪府立整肢学院」(以下、学院)は、児童福祉法に基づき昭和27年9月に開設された肢体不自由児施設である。

この学院の特徴は、子ども家庭センターとの連携のもとで、四肢に発達の遅れや後天的な障害をもち、何らかの家庭の事情により養護性の高い18歳以下の子どもを預かり、施設での生活をとおして整形外科の治療やリハビリテーションを行っているところである。

現在の入所児数は91名で、就学前の子どもには保育を実施し、就学年齢に達している子どもについては、併設されている大阪府立中津養護学校(小・中・高)での教育をとおして、将来の自立に必要な知識と社会性を培うことを目的としている。

●ボランティア受け入れのしくみについて

学院では、地域に開かれた施設として、平成12年4月から大阪ボランティア協会や地域の社会福祉協議会との協働でボランティアの受け入れを開始し、現在では205名のボランティアが登録。ひと月平均で延べ12名が、子どもたちとの遊びや外出、調理実習、手芸、パソコンクラブなどの活動にかかわっている。

活動に際しては、子どもたちが職員以外の人たちとかわることによって社会性を身につけ、成長していくことを最も重視している。そのため、ボランティアに対しては、職員の補助のためのマンパワーではなく、一人ひとりの「自発性」や「主体性」を伴ったプログラムの展開が期待されている。

そうした活動を、「無理なく、長く」継続してもらうために、施設内でボランティア委員会をつくり、委員が中心となって全職員がボランティア活動を把握できるように情報交換を行っている。また、一緒に活動するなかで、ボランティア自身に孤立感や不安感を与えないような、活動しやすい環境をつくり出すように心がけている。

●「一人の人」としてのかかわりを大切に

ボランティア受け入れにおいては、職員と「ともに一緒に」を前提

福祉施設におけるボランティアの受け入れにあたっては、ボランティア活動者本人の意欲の向上や継続に向けた支援や、利用者の生活向上、あるいは地域における福祉のまちづくりに向けたコーディネーションが求められています。今号では、3つの福祉施設での取り組みを紹介するとともに、受け入れにあたっての課題や留意点などについて考えます。

子どもたちとの外出は、ボランティア自身も楽しみながら

とし、また、専門的視点ではなく、「一人の人」として、子どもたちにかかわってもらうことを大切にしている。そのことから、コーディネーターの後藤光弘さんが事前に必ずオリエンテーションを行って、施設側のニーズとボランティア自身のニーズを重ね合わせながら双方の信頼関係を築き、効果的な活動へつなげていく役割を担っている。

また、ボランティア自身の不安の軽減を図り、ボランティアに対する感謝の気持ちを職員や入所児の全員が共有するために、ボランティアが活動する際には顔写真入りの活動紹介を院内の掲示板に貼り出したり、活動以外の時にも、ボランティア登録者とのつながりを保つために、メールによる情報交換を行うなど、きめ細かな配慮がなされている。

こうしたコーディネーションのための基本的な姿勢として、社会福祉施設が果たすべき本来の目的とともに、「なぜ、施設にとってボランティアが必要なのか」という課題に対して、職員としての明確な目的意識を持つことの重要性を後藤さんは強調する。

●ボランティアがもたらす効果と期待

学院で実施されているボランティアの受け入れの際には、子どもたちがさまざまな人々とかわることによって、自ら自己紹介をしたり、お礼を述べたり、丁寧な言葉遣いを体験することなど、職員には見せない姿をボランティアに対しては見せる場面もある。受身的な場面が多いなかで育っている子どもたちが、主体的に動けるよう成長していく機会ともなる。

一方、ボランティア自身にとっては、障害を抱える子どもたちと交流することが「学び」や「障害児・者理解を深める」場となっている。そして、それらの経験を通じて、今まで福祉について、要望だけや行政に任せて終わりにしていたものが、一人ひとり自らの問題として捉え、主体的に行動できる力が養われることが期待される。

取り組みの意義について、後藤さんは「子どもたちの人間関係を広げることも大切ですが、活動を通じて、施設の役割や機能、必要性、障害をもつ子どもたち・家族への理解を深めてもらいたい」と述べており、今後も地域に開かれた施設として、時代の変化に即した運営を追求するとともに、積極的なボランティアの受け入れに取り組んでいきたいと考えている。

ボランティアといっしょに遊びながら学んでいくパソコンクラブ

調理実習では、素材の段階から丁寧に指導する



誰もが参加できる 地域社会の実現をめざして

ごとうみつひろ
後藤光弘さん

大阪府立整肢学院 ケースワーカー兼ボランティア・コーディネーター

当学院がボランティアの受け入れを実施してから7年目を迎えおり、現在活動中のボランティアの方々には、これからも継続してかかわっていただきたいと思っています。

「石の上にも3年」ということわざがありますが、ある本のなかで、そのあとに続く言葉として「3年も我慢してくれたのは石の方」という解釈に出会い、心を打たれました。私たちが携わっている社会福祉活動、特に施設のコーディネーターの仕事は、自分一人の力ではとても不可能であり、周

困の人たちに支えられ、助けられているということ、この言葉が見事に表してくれていると感じたからです。

また、地域福祉の観点からボランティアの受け入れを考えるならば、限られた人だけが座る「いす取りゲーム」ではなく、誰もが参加できる社会をつくっていくことが大切です。そのためには、ボランティア活動をしていただく一人ひとりが、さまざまな活動をとおして、障害児・者やその家族の置かれている厳しい社会的状況を自分の問題として捉え考えてほしい。そして、福祉の課題について、頭で学ぶだけではなく、活動を通じて、身体で感じ、心で気づく、つまり「知っているつもり」から「本当に知る」ことが、これからの福祉を考えていくうえで重要です。

今後も、私自身も含めたすべての職員と、活動を続けてくださっているボランティアの方々が、「ともに一緒に」という視点を忘れずに取り組むことで、入所中の子どもたちにとっても、ボランティアの方々にとっても意義のある活動としていきたいと思っています。

地域生活を基盤とした取り組みにより 子どもたちの養育を支援

●社会福祉法人 旭児童ホーム [神奈川県横浜市]

施設の本園として機能している
「児童家庭支援センター」



「旭児童ホーム」(以下、ホーム)は、昭和24年4月に開設された「伸愛園」を母体とした定員40名の児童養護施設であり、家庭におけるさまざまな問題により養護の必要な18歳以下の児童を預かり、その養育を中心とした支援を行っている。

●地域に根ざした児童養護施設として

ホームでは、本園となる「児童家庭支援センター」を核として、子どもたちの居住と生活環境をできるだけ地域の一般家庭と変わらないものにするために、8棟の分園を近隣地域に配置している。

一般民家を借受けたそれぞれの分園では、親代わりの養育者を中心に、4~5名ずつの児童が生活をともにしながら、社会的自立をめざした「家庭」として機能しており、子どもたちが、地域の人たちや友達との関係を築きながら成長していくことへの配慮がなされているのである。

各分園の養育者は基本的に夫婦であり、妻が施設専従のホーム担当者となり、夫が非常勤の嘱託員となる。夫は日中ほかの仕事が施設の別の職場に勤務し、朝と夜を子どもたちとともに過ごす。そのなかで



は、養育者の実子もいっしょである。そして、それを本園が支えるしくみとなっている。

ホームでの支援で特徴的なことは、各分園にヘルパーを派遣するシステムである。現在では地域の主婦である6名のヘルパーたちが、ローテーションを組んで週4回の割合で各分園の炊事、洗濯、掃除などの家事を行う。そして、子どもたちの見守りとともに、時には各分園のつなぎ役をしながら、それぞれの家の生活をバックアップしている。



「子どもたちの生活に楽しみを」と、
洋裁ボランティアの方々

●ボランティアとのゆるやかなつなぎ役を果たす

ホームでは、職員や養育者との個人的なつながりによるボランティア活動が自然発生的に生まれるケースが多く、時には本園の交流スペースを使用した「教室」として、各分園からの子どもたちの参加を募りながら活動している。

主な活動内容は、趣味・稽古事の指導をはじめ、学生たちによる学習支援や子どもたちの遊び相手など、日常生活に根ざしたことが中心となっている。また、「子どもたちに生活の潤いを」という趣旨から、地元のバラの愛好家グループによる庭木の手入れや、音楽家によるチャリティコンサートなどが定期的に行われている。

こうしたボランティア活動は、子どもたちの潜在的な能力の再発見や心のケアといった側面において、とても重要な意味をもっており、地域での生活のなかで、子どもたち自身が生きる意欲や喜びを見出すためのきっかけづくりにもなっている。

取り組みにおいては、紹介者となる職員が調整役となり、ボランティアと職員、そして子どもたちとをゆるやかにつなげていく役割を担っているのである。

●取り組みへの今後の抱負について

子どもたちが地域のなかで普通に暮らすことをめざしているこのホームでは、ボランティアの受け入れにおいても、ボランティア自身のかかわり方を特別なものとするのではなく、ごく自然な関係とするための雰囲気づくりを大切にしている。

施設を訪れるボランティアたちは、子どもたちにとって、養育者や職員の知人・友人であり、自分の家に遊びにやってくる「お客様」なのである。

そして、そこに職員たちができる限り参加し、ボランティアや子どもたちとの人間的なつながりをもちながら、同じ仲間として日常生活でのさまざまな思い出を共有している。

この取り組みへの今後の抱負について、児童指導員の小山菜生子こやまな おこさんは「もともとは何らかの問題を抱える子どもたちが、地域生活を基盤として、ボランティアを含めたさまざまな人々との出会いのなかから、自分たちの将来が描ける人間へと成長してほしい」と述べており、地域との連携のもとで、子どもたちの「育ち」を支える施設としての役割を果たしていく考えである。

子どもたちとのかかわりのなかで、それぞれの特技を生かした活動を続けていただいています。また、職員の一員として、そうした活動に参加させていただき、そのことが私自身の「学び」や人間的成長につながっていることも事実です。

一般家庭と同じような環境のもとでの子どもたちの生活支援といった特殊性から、他の多くの福祉施設とは異なり、大々的なボランティアの受け入れをしておりますが、養育者や職員とのつながりで来ていただいているボランティアの方々とは、強い信頼関係によって、ともに施設を支える仲間としての協働意識を共有しています。

主役はあくまでも子どもたちであり、彼らといっしょに地域のなかでの住みやすさをめざすために、今後とも、ボランティアの方々とのゆるやかな関係を継続していけたらよいと思っています。



私自身の「学び」や 人間的成長につながっています

こやまな おこ
小山菜生子さん

社会福祉法人 旭児童ホーム 児童指導員

旭児童ホームでは、地域に密着した小規模児童養護施設として、子どもたちのゆるやかな成長を促すことを支援しています。それは、何も特別なことではなく、子どもたちに普通の生活を提供することが私たちの仕事であると思っていますが、「普通の生活」とは何かと考える場合に、明確な回答が出せない難しさも伴います。

施設では現在、さまざまなボランティアの方々にご協力をいただき、